14

ポンペ・ファン・メールデルフォールトの教えた近代臨床検査学

相川忠臣[1]・酒井シヅ[2]

[1]長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・医学部医学科生理学第一

[2]順天堂大学医学部医史学研究室

関寛斎の『長崎在学日記』の朋氏施療記事を読むと、彼の長崎滞在中、養生所でのポンペ・ファン・メールデルフォールトの臨床講義は日本人及び西洋人患者の診療に基づいて行われたことがわかる。千葉大学医学部所蔵の『長崎に於ける朋謨実験過眼鈔』も文久元年九月から年末にかけての関寛斎の朋氏施療記事とよい一致を示している。しかし順天堂大学医史学教室所蔵の『朋氏吉利仁幾備忘録』は朋氏施療記事にある九症例を含むだけでなく、さらに朋氏施療記事にはない内容を数多く含んでいた。おそらく文久二年一月、関寛斎が長崎を出立した後のポンペの臨床講義であろう。その中で特筆すべきは近代臨床検査学とオランダの兵士の症例を中心とするいわゆる軍陣医学の臨床講義とが教えられていることである。

『朋氏吉利仁幾備忘録』は亜氏講義筆記との合本であって山崎　佐文庫に属する。後者は西洋千八百五十九年我安政六未歳、魯西亜　亜列武烈倔篤口授、函館深瀬鼎洋春筆記、梅毒、で始まる臨床講義録である。

『朋氏吉利仁幾備忘録』は朋氏施療記事の九例を含む日本人患者一二症例の臨床講義から始まる。朋氏施療記事より整然とした内容である。それに続いて朋百氏四月初七日於養生館幾里仁幾口授蘭疇松本先生筆記とあり、麻疹について述べられている。養生所竣工後でポンペが帰国していなかった四月とは一八六二年しかない。その後にホヘー幾里仁幾とあり、内蔵痛治験、善飢病、ベリフト病水腫の一種、慢性下利治験、腹臓第扶斯治験、肺慨衝重症治験、産婦陰唇に發する血瘍治験、蘭疇先生治験、聖京倔性腸胃熱の第毘私に陥り気管枝及肺慨衝を兼る者などと続く。症例の多くが一八四〇年代前半のオランダの兵士である。年代から見

てポンペの経験した症例ではなく、軍陣医学臨床のオランダ語教科書からの引用であろうか。中途に良順がポンペの代講をした蘭疇先生治験もある。臨床検査学の内容は、詳しい臨床検査を述べた醫案の付いた症例の後、備忘録の末尾にある。備忘録の臨床講義が年代順に並んでいると仮定すると、ポンペは一八六二年、帰国前に臨床検査学の講義をしたことになる。

臨床検査学講義は『因液発備』にあるような吉雄耕牛が紹介した尿検査とは異なり、種々の分泌物を化学的、顕微鏡的に検査して病気を診断する高度な内容である。今茲に顕微鏡及舎蜜の験査を細論するのは治方に尤も緊要であり、古方を去り新説に著く事が肝要であるからという意の序言があって「汾泌排泄中に顕わる有無両機分を舎蜜術及び顕微鏡を以て之を験査し病徴を説」という表題から始まる。有機無機両成分のそれぞれに試薬、試薬験査、顕微鏡験査、験證、病徴の詳細が述べられている。その項目を列挙すると尿酸、蛋白、安没尼亜幾、尿無形澱渣（安没尼亜幾、尿酸加尓基、燐酸加尓基、炭酸加尓基、加尓基塩）、脂肪球、血液、血圏、膿液、エピテリウム、繊維素、炎球、精虫、糖尿、尿素、脂肪である。

将来他のポンペの臨床講義録を調べ、オランダ語原典を調査して、ポンペが近代臨床検査学を初めて伝習した事をさらに確かめていきたい。